

---

# 罪と咎（つみととが）

マオ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

罪と咎つみとが

### 【コード】

N9066C

### 【作者名】

マオ

### 【あらすじ】

とある歴史学者が過去存在した『夢の都』の住民を訪ねる。老女は言う。あそこは『夢の都』なんかじゃないよ、と。静かに老女が語った、昔の話とは。

## プロローグ（前書き）

中篇のような話です。あまり長くはありませんし、暗い話なので、注意ください。

罪と咎（つみととが）

## プロローグ

百年の昔、砂漠の中心にありながら水と緑豊かな国があった。国の名はサンディーノ。ある日突然、一夜にして滅んだ夢の都。今は激しい竜巻の中に眠るその国は、魔神の力で栄えていたという。

嘘か真か……それを調べるために私はここに来た。砂漠の中のとある町、小さな古ぼけた家。

ここにサンディーノから生き延びた内の一人の老女がいると聞いて。

今、私の前に座っている老女がその人だ。彼女の名はシェリ。サンディーノの真実を知る人物。

今や一人しか残っていない、サンディーノの語り部が話し始めるのを私はじっと待った。

しばらく私を値踏みするように眺めてから、老女シェリはゆっくりと話し出した。

夢の都の真実を。

\*\*\*

……誰だい、アンタ。学者さん？ 『砂の都』の話を知りたいって？

夢の都じゃないかって？ いや、あれは砂の都さ。嘘と幻の中に建つもろくて汚い腐敗の街だ。

（吐き捨てるかのような彼女の物言いに私は驚きを隠せなかった。極少数残されていた書物は全てがサンディーノを夢のような美しい都と称えていたからだ。何故ですかと問う私に、彼女は不意に笑った）

……そうだね、話してあげるよ。それがあたしの最後の役目だ。

（最後？ …… 確かに彼女は百歳をかなり越えていると聞いていたが、かくしゃくとしていてまだまだ元気そうに見える。

彼女は一輪の白い花を、大切そうに胸に抱いて話し出した）

…… 学者さん、そこに座ってよくお聞き。あたしが話すことだけがあの町の真実さ。

百年前、あの町にいたあたしは小娘で、何も知らずに暮らしてたとあるお方のお世話をさせていただいて…… そして真実を知ったのさ。

\*\*\*

サンデイーノの街は広く、それ自体が国であった。町の周囲を高い石壁が囲み、すぐ外は砂の野が広がるというの中は水と緑にあふれていた。食べ物に困ることなく、活気あふれる町の隅、ポツンと一つ高い塔がそびえていた。

活気のある街中と違って変わって古びた塔には出入り口が一つと、遙か高みに窓が一つだけ。

中に誰かいるのか、誰もいないのか…… 大人は誰もが知っているのに知らぬふりをする。

本当に知らないのは、町で無邪気に遊ぶ子供たちだけだった。

そんな子供たちが家へ帰り眠るころ、街中を駆けてゆく小さな影があった。

毎夜毎夜その影は塔へと駆けてゆく。

昼間は決して開かない扉は、その影を受け入れるときだけそつと開くのだ。

影は中へスルリと入り、扉は音もなく閉まる。

「ありがとう、サリュ」

「いいえ、アジュさま。さ、リツカさまがお待ちです」

扉の開閉をしてのけた老人が、小さな背をそつと押す。影の正体はまだ十にも満たぬ少年だった。冴え冴えとした月の光のような銀

の髪と、まつすぐに人を見据える強い力を宿した群青の瞳、ふつくらと柔らかな頬の可愛らしい男の子。

アジュと呼ばれた少年は、長い階段を駆け上っていく。老人サリユはそれを確かめて扉のかんぬきを下ろした。

誰かに知られてはならない。かけがえないこのひとときを。

アジュは螺旋の階段を羽が生えているかのように駆けてゆく。長い長い階段も、今の彼には障害にもなりはしない。やがて最上階、格子の降りたところにたどり着き、少年はその向こうに声をかけた。

「シエリ」

「……アジュさま。今お開けいたしますわ」

若き日のシエリが格子を上げる。ロープを引くだけでも重労働だが、そんなことは彼女にはどうでもいい。

この逢瀬を邪魔できないし、誰の邪魔も許さない。

中には狭い部屋ごとに娘がいた。どの子もほとんどアジュが入ってきたことに目を向けない。ひざを抱えてうずくまっていたり、ただぶつぶつと何かを呟いていたたり、ぼろきれにくるまって動かない娘もいる。

ただ、アジュが向かう先の娘だけが違った。鉄の格子に白い手をかけ、アジュが来るのを待っている。

アジュより一つか二つ年上の幼い少女。月のない夜、新月の闇のようであり、なおつややかな黒髪と、雲ひとつない澄んだ昼の空を封じ込めたかのような水色の瞳。

ここにいる娘の誰よりも美しいその少女のもとへアジュは駆け寄った。

「ねえさま」

「アジュ」

手を取り合うこの二人は血の繋がった姉弟なのだ。

「アジュ、ねえ今日はなにがあったの？ 楽しい一日だったかしら？」

「ぼく、魔法をまた覚えたよ。もっともっと強くなるから」

罪と咎（つみととが）

真剣な表情で、弟は姉に言う。  
「いつか、ねえさまをここから出してあげるから……！」

## プロローグ（後書き）

幼いけれども美しい姉と、幼いけれど利発な弟。そして、彼らが進む道は。

罪と咎（つみととが）

始まり……ORIGIN・1

(……塔？ 閉じ込められた娘たち……それは一体なんのためなの  
です?)

簡単さ、逃げられちゃ困るからだよ。娘たちは必要だったんだ。

(私はもう一度何故ですかと問うた。彼女は皮肉な笑みを浮かべて  
いる)

あの国は魔神の力で栄えていた。魔神は無償でそうしてやってい  
たと思うかい？

(まさか、とおぞましい想像をした私の考えを見透かすように、彼  
女はまなざしを鋭くした)

そう……多分あなたの考えているとおりだよ、学者さん……。

\*\*\*

集められた女児は十六人。全てが同じ年、同じ月、同じ日に産声  
を上げた子供たち。まだ物心つく前に親から引き離され、薄暗い塔  
に閉じ込められた。

外へ出たい、遊びたいと泣く子供たちにそれぞれ乳母がついたが、  
あやすわけでも慰めるわけでもない。

乳母たちはただ淡々と子供たちの身の回りの世話をする。気に入  
らないことがあると子供たちを叩くこともよくあった。まだ語尾が  
乏しいため、泣いてぐずることしか表現できない幼子を本気で叩  
いてなおも泣かせる。手がつけられなくなったら魔法で強引に眠ら  
せて静かにさせてしまい、夜になったらおのおの家に戻る。

塔には雇番の年老いた男、サリュだけが毎夜残された。

時折、上の階から娘たちの泣く声が聞こえる夜。

母を乞う、父を乞う、家族のぬくもりを乞う、悲しい声。剛毅たくましくな  
男であるサリュですら、気のめいるような夜が続く。感情を殺さな

ければやっていけない、そんな毎日。

何日も何日もそんな日が続いて　集められた娘たちが五歳の誕生日を迎えて数ヶ月がたったころ、一人の娘が乳母の手に噛み付いた。泣き喚いて暴れ、乳母にひどく殴られた他の娘をかばってのとだった。もちろんその娘も殴られて、高い熱を出した。

もともと体の弱い子で、よく病にかかりその都度サリュが面倒を見てやった娘だった。

おとなしい娘だと思っていたサリュは驚いた。

「何故あんなことを」

夜になり、少女の看病をしてやりながらサリュは思わずそう訊いていた。

「わたし……おもちゃじゃないもの」

熱に浮かされながらも。娘はそう言った。恐ろしいほど聡明な娘だった。

「わたしはわたしだもの……」

娘の名はリツカといった。その一件以来、サリュの心の中にリツカは強く灼きつく。

それから数日後に、サリュは乳母が帰ってからリツカに文字や魔法を教え始めた。殴られて怪我をするほかの娘たちを直してあげたいとリツカが懇願してきたからだ。

まだその頃には鉄格子が降りておらず、みな一緒に眠れた。そばにいるなら手当てもできる。リツカはただとどしくも、かいがいしく手当てをするようになった。幼子とは思えないくらい強く優しい娘である。

だが、すぐに乳母たちが気付き、サリュを問い詰めた。

「何故魔法なんて教えたの!？」

「文字まで!」

「あんたは見張りだけしていればいいのよ!」

「もし逃げられでもしたらどうするの!?!」

口々にサリュを責める乳母たちに、サリュは苦々しい思いを押し

殺して言った。

「逃げられるような方法は教えていない。魔法を教えたことが不満なら、娘たちを殴るような真似はやめることだ。あざや傷でも残れば大変なことになるぞ」

サリュにも嫌気がさしていた。乳母たちによるひどい暴行で、リツカだけでなく他の娘たちも弱ってきていたのだ。気がふれかけている娘もいる。

それを見てもなんとも思わない乳母たちをサリュは強く軽蔑した。「娘の誰かが死にでもしたらお前たちは打ち首だ」

娘たちをかばうような言い方が癪に障ったのか、乳母の一人が言い返してきた。

「ああ、やけにかばうこと。あんたまさかあの娘に心を奪われでもしたの？」

「まああ！ たかが扉番のクセに凶々しいこと！」

そして他の乳母たちも加わった。

「あんたこそわかってるんでしょね？」

「そうよ。娘たちに手を出しでもしたら、あんたのほうこそ打ち首よ！」

「幼女に気があるなんてあんたおかしいわよ」

「扉番もそろそろ変えたほうがいいんじゃないか？」

イヤミたつぷりの女の集団に、サリュは本気で怖気おそけを覚えた。長い間ここで扉番をしているが、こんなことは初めてだった。娘たちがいくら殴られて熱を出そうが、病に倒れようがいつも事務的に手当てをしていただけで、特になんとも思わなかったのだ。

年を取って丸くなったのだろうか？ ふとサリュは疲れを感じることもあった。

「サリュ」

そのたびに、リツカが、

「サリュ、だいじょうぶ？」

感受性が強いのか、すぐに察知して心配する。他の娘たちにそんな

なぞぶりは一切ない。他の娘は自分のことで精一杯だというのに、年齢から考えればそれが普通だというのに。

たとえ自分が熱を出して苦しんでも、リツカはサリュを心配するのだ。

「わたし、だいじょうぶ。サリュ、サリュはつかれているの？ やすめないの？ わたし、へいきよ。だからサリュ、やすんで」

……この娘のためなら、とサリュはこの時に思った。

わしはきつと、死ねるだろう……。

老いた男の、ひとときのきまぐれ　そのはず、だった。

始まり……ORIGIN・1（後書き）

ここから話は始まります。老いた男と美しい少女。まずはここから。

罪と咎（つみととが）

## 始まり……ORIGIN・2

なんだろう。幼子おさなこはいつも不思議に思っていた。

町の隅にある高い高い塔。

大人はみんな、あそこに近寄ってはいけないと言う。

魔神様のお怒りにふれ、呪われてしまふよ、と口をそろえてそう言う。

他の子供たちなど、恐れてしまって見ることもすらない塔を、アジユはいつも眺めていた。

あそこにはなにがあるんだろう。魔神様のお怒りに触れるってどうして？

高い高い塔の上、窓が一つ、ぽつんとひとつ。扉はいつも硬く閉ざされ、入ることすらできはしない。けれどアジユは入ってみたかった。中になにがあるのか知りたかった。

扉は開かない。窓は高く、あまりにも高く、手は届かない。

ならば 空を飛べばいい。風のように鳥のように、魔法を羽として。

アジユは懸命に学んだ。他の子供たちが魔法を習い始めるよりもずっと早くから学び、習得し始めた。何も知らない両親や周りの大人たちは喜んだ。なぜならばアジユはさる貴族の一人子であったからだ。跡取りならば優秀なほど良い。学問に限らず、武術、魔術など全て優秀であればいい。

アジユは優秀であった。教わることを難なく吸収し我が物とした。

そして、六歳になる前に飛翔の魔法を習得してのける。

待望の『方法』を得たアジユは夜を待ち、家を抜け出した。小さな体は夜の闇や、あちこちの障害物が隠してくれて目立たない。

それでも充分気を張って塔までたどり着き、呪文を唱えた。ふわりと足が地面から離れた。

届かなかつた窓がぐんぐん迫ってくる。近くで見るとかなり小さな窓だったが、こちらも小さな幼児の体。いとも簡単にくぐりぬけ、念願の塔内を……見た。

暗い部屋。そのなかで身を寄せ合って眠る娘たち。

これはなにとアジユは思う。これはなに、一体なに。下町にいる人たちよりもひどい格好をした女の子たち。

なんだろう、ここは。アジユには理解できない光景の中、彼の気配を察知したのか一人の娘が身を起こして少年を見た。

「……あなた、だれ？」

ちようど、月が窓に光を与えた。娘の顔をそろりと撫でる光はやわらかく、美しい。

いや、光よりなによりもその娘が。

「ぼ、ぼくはアジユ」

どきどきしながらアジユは名乗った。娘は美しかった。アジユよりもほんの少し年上にしか見えないのに、今まで会ったどんな女の子よりも目の前にいる少女は可愛らしく、美しい。

着飾ってすらいなというのに。

「きみはなんでこんなところにいるの？ 魔神様にのろわれちゃうよ？」

「のろわれる？ マジンサマってなに？」

「しらないの！？ 魔神様を！」

「しらないわ」

きよとんと娘がそう言ったとき、格子がこんこんとノックされた。

「サリュ」

娘が振り返り、小走りに格子に向かう。アジユがそちらを見ると、格子の向こう側に老人がいた。

「……」

老人はアジユを見るなりすごい勢いで格子を揺らした

「おまえ！ そので何をしている！ どうやって入った……」

その剣幕に娘のほうで驚いた。

「サリュ、怒っているの？ どうして？ あのひと、ここにはいけないの？」

「ああリツカさま……何もされてはいませんか」

「なにも。どうしてここにいるのと訊かれただけ」

「そうですね……ああ、近寄ってはなりません。小僧！」

ぎろりとアジュを睨んでくる目に、強い怒りと焦りがある。

「さっさと立ち去れ！ 二度とここには」

声を上げる老人を娘が止めた。

「大きなこえをだしてはだめ。みんながおきてしまうでしょう」

それから娘はアジュを見た。邪気のない、まっさらな視線。アジ

ユのどきどきは止まらない。

「私はリツカ。あなたはどうしてここにいるの？」

それが……出会い。

幼かった姉弟はそうして出会い、やがて回を重ねること数回で互いが姉と弟であることを知る。そして二年がすぎる頃、乳母が役目を終え、代わりに世話役の娘が一人塔に入った。

世話役に立候補したその娘はもともとアジュの世話係だった。アジュより年上で、まだ幼い彼の身の回りの世話と、遊び相手ということ、下町から売られてきた娘だった。

世話というのは、いずれそういう年齢になったときの夜の相手も兼ねている。

そのまま順調に時がたてば、アジュの妾めかけになっていただろう娘であったが、ある時、家宝の置物を割って怒りを買ひ、職を失った。貴族の怒りを買ったためまともな職にはつけず、塔内で働くしかない不幸な娘。そういう名目で。

真相はアジュの頼みである。シェリは信頼できる娘だと判断し、塔へ行ってほしいと頼んだ。そしてばくの大切なねえさまをまもってほしい、と。

娘はその願いを受け入れた。何よりも誰よりもアジュを敬愛し、

罪と咎（つみととが）

少年の幸せを祈っている娘が拒むわけがないのだ。

姉のためなら家宝などどうでもいい。アジユはそう思っていたし、娘はアジユの幸せだけを望んでいたのに、己の身が傷つことが貴族の怒りを買おうがどうということはないと思っている。

娘の名は、シエリと言った。

始まり……ORIGIN・2（後書き）

そして、聡い少年と、少年のために全てをかける女性。四人の想いが、この話の全てです。

罪と咎（つみととが）

(何故彼女がその姉弟のことを話し出したのか私には分からなかった。

それよりもその塔の中の、ひどい環境におかれた娘たちのことが気になった。

私の想像したことを彼女はその通りだと言ったのだ。

では、その娘たちの行く末は……！

私の表情がこわばるのと正反対に、彼女はどこか幸せそうに姉弟のことを語り続ける)

そう……何も知らずにあのお二人にお仕えして……ほんとうにあたしは幸せだった。

お二人にお仕えすることだけがあたしの幸せなんだから。

\*\*\*

リツカが九歳、アジユが八歳になっても二人の逢瀬は続いた。それは姉弟というには親密すぎ、それ以上と気付くには二人は子供すぎた。サリュとシエリは気付いていたが、邪魔など決してできるものではない。

当然ではあった。リツカにはアジユだけが希望であったし、アジユの周りにはリツカほどの美しさを持つ少女などいなかったのだから。

毎夜毎夜の訪れを心待ちにする少女と少年。心の結びつきは強く、何者の介入も許されぬほどだった。

アジユのいない塔内はゆるりゆるりと時間が過ぎる。苦痛になるほど緩やかな時間の流れにリツカはいつも耐えていた。サリュもシエリも必要以上に接することを禁じられてしまったのだ。リツカに文字や魔法を教えたことでサリュはひどく罰せられた。

危つく広場で首を落とされるところを、そ知らぬふりでアジユが救い、一生を扉番に費やすことで命を拾った。まだ幼いアジユはそんな発言を許されるほどに有望視されていたのだ。

あちこちからの期待を一身に背負いながら、アジユは勉強にも闘術にも魔法にも精を出す。

強くなれば、偉くなればいつか姉をあつた塔から出してあげられると信じて。

そして八歳になりしばらくした頃、アジユは正式にそれを誓った。「ねえさま、約束しよう」

月明かりの下、アジユが差し出したのはおもちゃの指輪。幼い彼が手に入れられる精一杯の代物。紅いガラスのはまった金色の指輪。「ぼくがねえさまをここから出してあげるよ」

「……ほんとう？」

「うん。これが約束のしるし」

リツカはそつとその指輪を受け取る。あまりにもちやちな、頼りない指輪。

けれど、きっとそれが二人の全て。

「アジユ」

まっすぐに、少女は見つめる。

「まっっているわ」

誓いは受けられた。所詮子供の約束事とは笑えぬほど、おごそかに。

\*\*\*

十歳になったとき、アジユは王家の姫君と出会った。姫の結婚相手の候補として、数人のほかの貴族の子供と一緒に面通しさせられた。少年たちの中で一番優秀であるアジユが選ばれるだろうと誰もが思っていた。

両親も期待してアジユを飾って送り出した。王家の一員に名を連

ねることはこれ以上ないほどの名誉であつたから。

アジュ本人にその意思はなかつた。次期王になんて興味はない。ただ想うのは姉のこと。

もう四年になる秘密の逢瀬。誰にも話せない、訊けないことから両親はどうして姉のことをアジュに話さないのだろう。どうして家族の中で姉だけがあの塔にいるのだ？

「誰に尋ねてもいけません」

以前聞いたとき、サリュはひどく苦しそうにそう言っていた。

「一言漏らせば全て終わります。わしとシエリは首を落とされ、アジュさま、あなたは二度と塔に来ることは許されません」

「どうして。ここは一体なんなの？」

「サリュ、教えて。シエリ、何故なの？」

リツカ本人もわけを知らずにここにいる。

「わたしはどうして家に帰れないの？ みんなも……」

その頃、周りを見渡すと他の少女たちは、ただ虚ろうつろに中を見上げるだけだった。希望も願いも、祈ることもない。なにもかもあきらめて時間が流れるに身を任せている。

シエリが身の回りの世話をしやっても礼一つ口に出さない、出せない。

それを疑問に思うこともない。

ただ、リツカ一人だけが、わずかに疑問を抱くだけ。

「ねえ、何故なの？」

「ああ……リツカさま、お訊きにならないでください」

シエリの瞳が潤む。この美しい少女にどれだけ仕え尽くして、心の底から敬愛していてもそれだけは答えられない。

「どうか……このシエリを哀れとお思いなら……それだけは」

答えられない……言えるものか！

『どうして』そう言いたいのはサリュもシエリも同じだった。

何故、何故、何故！ 答えは胸の奥底に、灼熱のようにわだかまる。

「どうか……それだけは」

『神よ！ お怨みいたします！ なにゆえにこのようなひどい仕打ちをさせるのか！』

「リツカさま、アジユさま。いずれ分かることです。今はどうか……お訊きにならずに……」

サリユの苦痛そのものの言葉に、リツカはふっと泣きそうな顔になる。

「……わかったわ。だからサリユ、シエリ、泣かないで」

「……わしは泣いてなどおりません」

ぼたぼたと熱いものが顎を伝い流れ落ちても、サリユはがんとし  
て言い張った。シエリはもはや声もなく。顔を覆うだけ。

問えない。今だ幼い姉弟にも、この二人が何か、とても重く  
痛いものをうちに抱えているのが理解できる。大人が子供の前で泣  
くほどのこと。

無理に問うことができぬまま、いつもと変わらぬ日々がすぎ……  
今日アジユは姫に会う。

ほかの子と違い、アジュは別段緊張もせず、姫が姿を見せるのを待つ。

なんとなしに来る前に教わったことが頭をよぎった。

王家の姫は魔神の花嫁。姫と結ばれたものは魔神の力を得る。

だからなんとしてでも姫に気に入られるようにと、父は言った。

姫のご機嫌を損ねないようにねと、母は言った。

父と母の言っていたことなどどうでもいいが、魔神の力というのは気になる。

幼いアジュにも、この国が魔神の力で栄えているのは分かっている。

『魔神』がどういうもので、どんな力を持っているかまでは知らないが、砂漠の中で大きな街を維持しているくらいだ、とても強いだろうことは分かる。

その力を得られれば、姉を塔から救い出せるかもしれない。

ぼんやり考えていると小さくざわめきが起きた。姫が供の者を連れて姿を見せたのだ。

きらびやかに飾り立て、豪華なドレスを身にまとった、アジュよりも少し年上の少女。

可愛らしくはあるけれども、小憎たらしいというのが先に立つ、そんな容姿の少女だった。

「アジュというのは、どれか？」

己が権力を知っているのか、どこか高慢な声。

「ぼくです、姫様」

顔を上げるアジュに、姫は無遠慮な視線を投げかけ値踏みするかのようじろじろと眺めた。

「姫様」

供の者の制止の声でようやくやめる。

「ふ〜ん……顔はまあまあ良いな。うむ、合格じゃ」

姫は次々と並ぶ少年たちを眺め、品定めをしてゆき、気に入らない者はすぐさま追い出した。相当わがままな娘らしく、自分の我が通らないと途端に怒り出す。

それだけで充分だった。

アジュが、自分はこの姫を好きにはなれないと自覚するには。

皮肉なことにあの場にいた者で姫がもつとも気に入ったのはアジュだった。面通しのときに並んだ少年の中で一番見目麗しく、優秀であるのだから当然かもしれないが、アジュには迷惑でしかなかった。

謁見の日以来、姫はことあるごとにアジュの元へ押しかけた。魔神の力に関心のあるアジュは拒否できない。それでも一定の距離を保ち、親密になることは注意して避けた。

友人ならばまだしも、姫は明らかにそれ以上を望んでいたからだ。その点では街の女も同じだった。アジュの目にとまり、妻とまではいかなくとも、妾にでもなればいい目が見られる。幼い少年の周りには欲と打算が渦を巻いていた。

嫌気がさすような毎日で、唯一の時間がリツカといるひととき。

この頃から、弟は姉を異性として意識するようになっていた。

リツカには欲がない。打算もない。ただ、アジュを待っている。

どこの誰よりも美しい、たった一人のアジュの姉。

「ねえさま、ぼく、ねえさまが好きだよ」

「好き？」

「うん……」

胸が痛い。何故だろう？ いつもいつも姉と会つと胸が高鳴る。けれど同時に耐え難いほどの痛みもある。

胸の痛みはアジュに告げる。

リツカが姉じゃなかったら。

そうしたら……そうしたら？

「わたしもアジュのこと好きよ」  
微笑むこのひとを抱きしめることができるのに。

\*\*\*

「ねえ、シエリ」

間を隔てる氷のような鉄格子。それにもたれてリツカは窓を見上げる。陽光が明るく差し込み、外からはかすかに人々が生活しているざわめき。

行ってみたいと思っても決して許されない『外』。

塔しか知らない。塔しか分からない少女たち。

どうしてわたしは、わたしたちは出られないのだろう、出てはいけないのだろう……ずっとそう思っていた。

「シエリは知っているのね」

怖い。アジュがいつか来なくなるかもしれない。サリュもシエリもいなくなるかもしれない。独りになるかもしれない。そう思うとたまらなく怖かった。

「わたし、いつかここから出られるかしら」

怖い。気が狂いそうな塔の中、リツカはただ、呟く。

「わたし、ずっとここにいななければいけないのかしら」

「リツカさま……」

泣き出しそうな目のシエリ。彼女はリツカに言った。アジュはいつか名のある女性と結ばれ、ここには来なくなるでしょうと。

それが貴族であるアジュの定め。

いずれ弟とは別れが来るのだ。それをいやだといくら拒否しても逃れられない。

許されない。

アジュは弟。リツカは姉。血の繋がった彼女らの関係は覆せない事柄だ。

アジュが塔へ来なかったら、弟と会わなかったら、リツカに希望

はなかつたろう。

ほかの娘たちのように、ただぼんやりと日が過ぎるのを感じるだけで済んだだろう。

疑問も、苦痛も……絶望も感じずにいられたはずなのだ。ここはそのための塔なのだから。

「ねえ、シエリ」

ぼんやりと、リツカは言う

アジュとの誓い、おもちゃの指輪を日に透かすように見つめながら。

「わたし、アジュを待っていてはいけないのね……」

アジュに言っただけではないことがあった。サリュとシエリが嗚咽をこらえながら十一歳になったリツカに告げたこと。

『この塔にいる娘は、いずれ魔神に捧げられる運命』

「……アジュ」

今はただ、その名にすぎり生きるだけ。許されないことだと分かっていてもいる。アジュは弟だ。リツカは姉なのだ。絶対的な事実がある。痛いほど理解している。

それでもほかの人など考えられない……！

いつかと思いたい、信じたい。誓いが果たされることを信じ続けていたい。

閉ざされた現実の中で、今はそれだけが幸せな夢。

あきらめることは、できなかった。

罪と咎（つみととが）

贄…… SACRIFICE・2（後書き）

そうして、少年と少女は互いの想いを秘めたまま、時間が流れる。  
禁断の感情は、流れ始めてしまいました。

腐敗した現実…… EGOISM・1 (前書き)

今回はかなり不快な内容です。ご注意ください。

罪と咎(つみととが)

……わかるかい、学者さん。おぞましいと思うかい、このお二人を。

姉と弟でありながら想い合うお二人を。

（いいえ、と私は答えた。それだけひどい運命の中にある少女が、信じられるものは少年だけだったのだ。それが実の弟でも心寄せずにはいられないと思う……あまりにも酷なことだとも思うのだけだ。）

私がそう言うと、彼女は満足げに頷いた（

ああ、ああ、あんたは分かっているようだ。そうだよ、残酷さ。

でもね、ひどいことはまだあったんだ。

あたしはあんたに言っただろう？ サンディーノは砂の都。もろくて汚い腐敗の街だと。

（魔神の贄、<sup>にえ</sup>それだけでも十分ひどいと私は思うのだが、彼女はそれ以上にひどいことがサンディーノにはあったと言う。

私は黙って彼女が口を開くのを待った。

いるのかどうか分からない魔神の存在よりも、幸薄い少女のほうに気がなり始めていた（

\*\*\*

街は緑と水にあふれ、飢えも乾きもない。他国にあるであろう貧民街すらここにはないのだ。平民たちが住む下町も他国よりは遥かにまじだった。

そう……一番ひどいところは街の誰もが見ない、気にしようとするらない塔の中。

とらわれの娘たちがいるところだ。リッカ以外は言葉すら満足に喋ることができない。



暴され殺されるのだとしても、こいつらを呪ってやる。

『許さない……！！！！』

「おやめなさい！！！！」

その時、今まで目をつぶり耳を塞いで震えていたシエリが止めた。顔は恐怖で真っ白で、夜目でも分かるほどに震えていたが、何とか走ってきてリツカと男たちの間に割ってはいる。

「魔神様の贄に、手を出すことは許されないわ！」

「そいつは醜女ししめだ。間引くんだよオレたちは」

「なにをぬけぬけと……！ そんな不屈きな真似はさせない。大体、魔神様のお怒りに触れてもいいの！」

魔神の怒りと聞いて、男たちは一瞬退いた。けれど獣に人の言葉は通じない。理屈も通用しないのだ。

獣たちはシエリを見て、にやりと笑った。

「……じゃあ、お前が相手をしる」

「！！！！」

「だめ！！！！」

叫んでリツカは鉄格子に手をかけた。

「そんなこと許さない！！！！」

怒りのまま鉄格子を握る手は、力の入りすぎで白くなっている。その細い手に、シエリは男たちから見えない角度でそつと手を添えた。

あかぎれた手はボロボロで硬く、痛々しいけれど優しくかった。そんなシエリの手が、リツカはとても好きだったのだけれど。

そつと触れた手が、そつと離れ……、

「いいわ」

シエリは頷いた。

「シエリ！」

「奥へ行って寝ていなさい」

冷たく装う声、その奥の優しさを、痛いくらいにリツカは知っている。

「だめ！ シェリ！」

「耳を塞いで、毛布の中で眠るのよ」  
優しく悲しい。

「シェリ……シェリ……！」

「いいわね」

離れるシェリの背が、震えていることをリツカは知っていた。

その夜初めてリツカは憎しみを覚える。真剣に人を殺したいと望み、それだけの力がない自分を呪った。涙を流しながら、力がほしいと願った。

その晩、八人、半数の娘が乱暴され、殺され魔法で焼かれ 存  
在すら抹消されたのである。

『……忘れない。わたしは忘れない。忘れない……！』

このしうちを。この痛みを。この怒りを。

憎しみを……！！

腐敗した現実…… EGOISM・1（後書き）

現実。酷いもの。惨いもの。リツカはそれを知りました。そして、憎しみも。

罪と咎（つみととが）

十一歳になったアジュは二つ三つ年上の子でも勝てぬほどに強くなっていた。武会に参加すれば確実に優勝し、魔術の腕も宮廷魔術師を唸らせるほどだった。大人にも劣らぬその実力に、周囲はみな驚きつつも褒め称えた。

「アジュさまは次期国王にもふさわしい」

「姫様となんとお似合いだろうか」

「お父上も鼻が高いだろう」

大人たちのおべっかにもアジュは無関心だった。回りは姫とアジュが結ばれることを強く望み、そうさせようと画策していたが一切無視していた。

彼が結ばれたいと願うひとは姫ではない。

その願いが決してかなうこともないとわかっているのだけれど。

「のう、アジュ。もう休んだらどうじゃ。美味しい菓子があるといふに」

時折、姫はアジュの鍛錬にまで顔を出すようになった。どれほどアピールしても一向になびかない彼に、どんどん興味と好意を抱きつつあるようだった。わがままな姫に集中の邪魔をされることも少なくなかったが、それも度重なると乱されない強靱さも身についた。リツカのことを思い、鍛錬すればなんてことはないのだ。

「のうアジュ。わらわと茶をたしなもうぞ」  
アジュは応えない。そのうち姫も黙ってアジュをうつとりと眺めるようになった。

剣も槍も弓も体術も一通りやってのけたが、アジュが好んだのは棒術である。その体さばきはすでに師を越えつつあった。剣や槍とやりあっても、引けを取るどころか逆に叩きのめしてしまう。魔法と組み合わせると、ほぼ敵はなかった。

天才としか言いようのない、すさまじい才能である。

「のうアジユ。そなた何故そこまで強くなるうとするのじゃ？」

小首をかしげる姫に、アジユはようやく動きを止めて答えた。

「……どうしても、やりとげたいことがあるんです」

『遂げられぬ想いなら、せめて塔から出してあげたい』

「そのために、力が要るのです」

『外も知らない姉さんのために……』

アジユの内心の想いを知らない姫は、うわべの言葉を聞いてなんじやと笑った。

「やりたいことがあるのならわらわがしてやるぞ。力がほしいのならわらわと結婚するが良い。魔神の力を与えてやるう」

とてもいいことを思いついたというように、姫は手を打った。

「そうじゃそうじゃ。アジユ、わらわの夫となれ。そうすれば全てが手に入るぞ？ 何もかもアジユのものじゃ。なあんでも聞いてやるぞ、そなたの望み」

きゃらきゃら笑う姫の申し出は、アジユにとって確かに魅力的だった。

リツカのために力は欲しい。そのために姫と結ばれても構わない。どうせこの想いはリツカが姉である限りかなうことはないのだ。

「姫様……ほんとうですか」

アジユは問う。

「ほんとうに、ぼくの願いをかなえていただけますか」

「おお！ ほんとうじゃ！」

アジユが乗り気なのだ喜んで姫は頷く。

「では……あの塔を」

「塔？ あれか？ 中を見たいのか？」

本当はリツカを塔から出してくれと言いたかった。だが、何故入ることの許されない塔にいる姉のことを知っている？と問われれば困ることになる。

口ごもるアジユの態度を応ととつたらしい姫は、キョトンとしな

がら言葉を続けた。

「あんなところ見ても面白くもないぞ。いるのはわらわの身代わりだけじゃ。小汚い娘しかおらん。あと三年もすればいなくなる連中だけじゃ」

姫の言葉にアジユは眉を寄せた。

「……『三年もすればいなくなる』って……?」

……身代わり?

姫の?

……リツカが?

何故!

んふ、と姫はにんまりした。

「アジユだから教えてやろう。どうせ成人すれば誰ぞから聞くことであろうしな……」

姫が語ったそれは、サンディーノの公然の秘密であった。知らないのは成人、十五歳前の子供だけ。知ってしまったえば皆が目を逸らし、知らぬフリをして黙認する事柄だ。けれど、ほかの誰でもないアジユには知らぬフリができない話であった。

「この国が魔神の力で栄え、潤っておることは分かっているな?

魔神はな、古代の契約によってサンディーノを守護しておるのだ。

契約の内容は、王家の代々の姫をささげること。姫が花嫁として赴くことで魔神はサンディーノに恵みを与えておる。だが、高貴なる王族の姫が、そのような品物扱いされるなど王家の血が許さぬ。

だから 代わりじゃ。姫と同年同月同日に生まれた娘で、一番見目良い娘を姫と称して魔人に捧ぐのじゃ。娘にも良いことなのじゃぞ。嘘でも姫と名乗れるのだからな。下賤の身には余る幸せじゃ、魔神の贄になれるのじゃからな」

高慢な笑い声がアジユの身を打った。衝撃はあまりにも大きい。

それでも彼は声を絞り出した。姫に動揺を気付かれないように何

とかつくろつて。

「一番見目良い娘といたしましたね、そのほかの娘はどうなるのですか？」

「無論、死刑じゃ。わらわと同年同月同日生まれの娘などわらわ一人でよい。ほかにはいらぬわ」

あつさりとながら花を摘み取るのと同じように無造作に姫は言つてのけ、笑つた。

「もともと魔神の贄としてのみ生まれた身。生きながらえても意味などない。そうじゃろ？」

そこから、アジユは姫とどういふ会話をしたのか覚えていない。機嫌よく帰つて言つたので、迂闊なことは言わなかつたようだ。姫のことなどどうでも良かった。

告げられた真実があまりにも痛かつたから。

その晩、アジユはリツカに逃げようと言つた。全てを話し、この腐りきつた国から出ようと。

リツカは首を横に振つた。真実を聞いて憎しみも怒りも燃え上がったけれど、逃げるわけには行かない、と。

「なんで？ 姉さん！」

「アジユ、わたしひとりじゃないわ」

濁つた国の犠牲になつてゐるのは、リツカだけではない。ほかにも娘はいる。

そしてサリユとシエリもいる。身を粉のようにすり減らしてアジユとリツカに仕えてくれている二人。見捨てて逃げてくださいと、サリユもシエリも言うのだけれど。

「アジユ」

逃げることはできない。リツカがいなくなろうが娘が贄になることは変わらない。逃げたとしてもリツカたちが逃げたことはすぐに知れ、サリユとシエリは殺されるだろう。

それに、魔神の力から逃げ切れるかどうかも分からない。

「わたしと、生きる覚悟はある？」

ずつと、リツカは考えていた。生きてやる。生き抜いてやる。人を人とも思わぬこの国を決して許しはしない。

殺された娘たちのために。汚されたシエリのために。

そして、自分のために。

「魔神を、倒すのよ」

強くなれ。生き抜く力を手に入れる。それしか自分たちに生きる術はない。

アジユはすぐに頷いた。迷いは微塵もない。

「姉さん、誓いを」

鉄格子越しに手を伸ばす。触れる。握りあう。

「あなたのために、あなたとともに、生きるよ」

「あなただけよ、アジユ」

そうつと触れるだけの口付けがなされ、誓いは為された。

正気ではない。サリユは泣きながらそう思う。

正気ではない。シエリは突っ伏して嗚咽する。

それでも……それでも。

「愛してる」

「愛しているわ」

それでも、これしかないのだ。

幼子を選ぶ道としては、あまりにも過酷で重いもの。

出会わなければ済んだだろう。ほかの子と共にアジユは大人になり、あるいは姫と結ばれたかもしれない。

出会わなければ終わっただろう。ほかの娘と同じようにリツカは

殺されるか、あるいは魔神の贄になったかもしれない。

けれど、出会った。出会ってしまった。違える道はもはやない。

リツカ十二歳、アジユ十一歳。

これより二人は生きるために、戦う。

腐敗した現実…… EGOISM・2 (後書き)

生き抜くために、子供が選ぶ道は。

罪と咎(つみととが)

保身だったのさ。王家は、姫は、愛娘の命、自分の命惜しさにほかの娘を踏み台にしたんだ！

（彼女の話を聞いて浮かんだ疑問があった。

魔人はそのことに気付かなかったのか？

強大な力を持っているのなら、その程度のことすぐに分かるはずでは？

思ったままを彼女に訊いてみる。彼女は私の質問にさらに声を荒げた）

魔神？ ああ！ あいつだってどうだってよかったんだよ！ 王家の姫であろうがなかるうが、若くて美しい娘であればわかりやしなかつたんだ！

そんなやつをサンディーノはあがめてた。若いときのあたしもね！ あの頃の自分には怖気がはしるよ、本当に！

（彼女の興奮が心配になってきた私はなるべく穏やかに話の続きを促した。

決意した姉弟はどうなったのですか？

サンディーノが減びたということは、姉弟が魔神を倒したということですか？）

ああ…… そうだね。続きを話そうか……。

\*\*\*

それから、アジユはいつそう激しい鍛錬を重ねるようになった。限界を超えて倒れることも一度や二度ではない。それでもどうにか体を壊さぬように調整しながら、なお鍛錬する。

寝込んでいる暇などないのだ。時間は限られている。あと二年か三年で姉の運命は決まるのだ。一刻も早く強くならなければならぬ。

姫や周囲の人間はどうしてアジユがそこまで必死になるのだろうといぶかった。その都度アジユはこう言い訳した。

「至上の女性にふさわしい人間になりたいから」

こう言うともも知らない者は皆納得した。アジユはまじめに考えているのだと。

王家の姫とつりあうような人間になるためなんだな、と。

姫など有頂天になって喜んだ。

「アジユ……わらわは嬉しいぞ。そこまでわらわのことを……！」

アジユが自分を好いていると疑わない姫は、始終上機嫌でいる。

アジユがそこまで考えてくれているのなら、自分もアジユのために何でもしようと思えて言い出した。

アジユはその言葉に甘えて見せた。

「もつともつと強くなりたいたいのです。だから……姫」

アジユの申し出に姫はさらに喜んだ。

王宮魔術師の禁呪を学びたいとの申し出に、姫は二つ返事で許可を出した。彼が本当に望んでいるものを全く知らない、哀れで愚かな姫君。

アジユが求めているのは強い力だ。比喻でなくこの国を壊してのけるくらいの力が必要なのだ。

この国を支える魔神を、殺すだけの力が……！

\*\*\*

アジユが天才であるように、姉のリツカもまた優秀であった。魔法など初歩の癒ししか知らないサリュと、生活を補助するものくらいしか分からないシエリを師に、どんどんと自分で魔法を作り出していった。そして、アジユが王宮から学んできた禁呪の類もすぐに己が力に変えていった。

「わたし、このくらいしかできないから」

リツカの体は弱い。少し無理をするとすぐに熱を出してしまう。

弱い体ではアジユのように鍛錬などできはしない。そんな弱い体だが、リツカはあきらめてはいない。

ひ弱な体では戦えない。ならば魔法で力を得よう。きつと一人では無理だから。リツカ一人でも、アジユだけでも、魔神を倒せはしないだろう。

ふたり、そのときのために足手まといにならないよう、必ず訪れるいつかの為に、力を蓄える。考えなくてはならなかった。強さだけでなく、美しさも。

生け贄に選ばれなければならない。魔神に近付くには、花嫁に選ばれる必要がある。

だが、それはまず間違いなくリツカが選ばれるだろうと、サリュもシエリもアジユも思っていた。塔の中の娘たち、その中でリツカは一際美しい。幼い頃からそうだった。

成長してもそれは変わらなかったのだ。

「……ああ、ほんとうに……リツカさまはお美しい」

シエリは泣いた。リツカたちのように希望を抱くことなど彼女にはできない。リツカやアジユよりも世間を知っているがゆえに、シエリの中の希望はいともたやすく死んでゆく。

魔神に挑んでも勝つことなどないだろう。そして二度と……二度とこの姉弟には会えない。

「シエリ。信じていて。わたしとアジユが生き残ることを」  
まっすくな。

「サリュ。あなた達をきつと護つてあげる」

リツカの言葉が痛い。

できぬことを望んでいるのだ、この姉弟は！

大人から見たならば戯言だ。ひとこと、そう言えばどれだけ良かったか。

現実はまだにも残酷で無慈悲で……つらいもの。

サリュもシエリも見なかったフリができれば苦しみはなかったらうか。

何もかも全てが夢であればよかったと、サリュは思う。

どんな悪夢だろうと、夢ならいつかさめて終わるのにと、シエリは思っている。

痛いほど、これが夢であればと願ってしまふ。

途方もない夢と願い。

この悪夢のような現実が覆されることを望んでしまふ。

それは罪だ。この街に住んでいる以上考えてはいけないことなのだ。

それでも、サリュとシエリは願ってしまふ。

どうか。

彼らの目の前で、必死で力を得ようとしている姉弟を泣きそうな気分で見守りながら。

どうかお二人が幸せでありますように。

\*\*\*

運命の日はリツカが十四歳になる日に訪れた。

その日、城下では姫の誕生祭が盛大に開かれていた。もちろん城の中でも祝賀パーティーが開かれており、アジユもそこに出席していた。周りが勝手に決めた姫の婚約者として。

祝いの声が街をにぎやかにしている。住民はみな幸せそうに姫の誕生日を祝い、騒いでいた。

塔だけが違う。ここだけはいつもよりもずっと重苦しい雰囲気だった。

魔神の花嫁の選出が行われるのだ。一番美しい娘を贅にするために。

王家の姫が安穩と暮らすための替え玉を選ぶ儀式。

入ってきた兵士たちと司祭は無言のまま娘たちを見回し

結論

はすぐに出た。

贅となるのは、リツカ。

昼つす暗い塔内にあつてもリツカの美しさは損なわれることがない。贅を決めるために感情を殺した男たちも一瞬目を奪われたくないのだから。

選別はほんの一瞬で終了した。ほかの娘たちは隅に追いやられ、嫁入りの準備が始まる。

まず、余計なことを話せないようにリツカには声を封じる魔法がかけられた。

たくさんの宝石と、高価なドレスとが持ち込まれ、ひとつひとつ丁寧にシエリがリツカを飾ってゆく。こんな状況でなければ『よくお似合いです、リツカさまは本当にお美しい』と喜んでいられたのに、そう考えてシエリは心で泣いている。表情には出せない。

これは花嫁衣裳ではない。死に装束だ。どれだけ美しくとも、喜ばしいものでは決してない。

最後に薄いベールをかぶせて花嫁の準備は終わった。姿だけを見るならば、ため息の出そうな美しさだ。

「お前は『姫』だ。この日この時だけ王家の『姫』を名乗る栄光を許される。そのことを忘れるな」

兵士の言葉を、白いベールの下でリツカは無表情に聞いている。頷きもしない彼女に兵士はいぶかしげな視線を向けたが、それだけだった。

「魔神様の贅となることを至上の光栄と思え」  
当たり前のように兵士はそう告げる。とても勝手な言い草を、さも当然のように言つてのけた。

今回の花嫁が何を考えているかも知らずにいる。このままこの腐りきった安穩の日々が続くか疑っていいない。

たった一人の少女に全てを押し付け、背負わせることを当然と思

っている。

少女の命が散っても、なんとも思わないのだろう。  
そのままでもいい。

リツカはベールの下からサリュとシェリをちらりと見た。

……今夜、月が出たら。

二人はリツカにそつと頷いて見せた。

迷いも惑いもそこにはない。

ただ、進むだけだ。

今宵、月が出たら、百三十八代目の花嫁が、魔神のもとへと赴く。

罪と咎（つみととが）

命運……FATE・1（後書き）

さあ、破滅への道へ。

日が落ちる頃、アジュは祝宴を抜け出した。

己が血で書いた呪符をくわえ、塔に駆け寄る。その符をくわえている間、少年の姿は人には見えない。禁呪からリツカが独自に編み出した魔法である。改造に改造をくわえてかなり効果時間は長い。そのまま、月が出るまでのわずかな時間、待つ。

周りには誰もいない。これからなにが起こるのか、大人はみな知っていて、子供を近づけないようにしているのだらう。王城の周辺だけが騒ぎの中にある。

本来ならば、その中心にいる姫君こそが贄となるのが魔神との約定。

腹立たしい。アジュはそう思う。

知っていながら知らぬフリをする民が。

当然だといわんばかりの王族が。

そして、姉に出会わなければ自分もその中にいただらうことが。

腐った国。

腐った民。

その中の自分。

実の姉と生き抜くために、全てを壊そうとしている自分も汚い。それでも。

アジュは塔の小窓を見上げる。今頃最愛の姉は着飾っているだらう。さぞ美しい花嫁であるはずだ。実の弟さえ惑うのだから。

魔神になど、渡さない。

リツカだけがいればいい。

自分もきつと病んでいる。それが分かる。それでいい。

だってこの国は エゴイズムの上に成り立つ砂の楼閣。

そこにいる人間もエゴの塊。

利己心で成り立つ国ならば、それを崩すのも人の利己心。

……お笑いだ。  
アジユは少しだけ口元を緩ませた。  
犠牲をもって在る国だから、犠牲をもって終わらせよう。  
全てを。

月が天に昇る。運命を照らす光はあまりにも静かで冷たい。

\*\*\*

城に対する方角にある広場。そこに兵士に連れられて『花嫁』はいた。

広場の中心、複雑な紋様が彫られている場所に独り立たされる。冷酷に兵士たちと司祭が見守り、月の光が幻惑のように振る中、その紋様がうつすらと光り始めた。時間である。魔神が花嫁を呼んでいるのだ。

「……魔神よ、ここにそなたの花嫁を捧げる」  
離れて見つめる司祭が告げた。

「王家の姫君を」

偽りの言葉に反応して、紋様の光は花開く。

「契約の名の下に」

光は音もなく、花がしぼむかのように『花嫁』を包み込み、消え失せる。

歪んだ約束事は完了された。

これでまた、次代の姫君が生まれるまで安定が続く。  
平和という名の腐敗が続く……

\*\*\*

アジュ。

封じられた声か彼を呼んだ。アジュは唇から符を離す。彼の目の前には花嫁姿のリツカがいる。どんな女性よりも美しかった。

そう言ってあげたかったけれど、今は時間がない。

「行こう、姉さん。時間がない」

頷き、リツカはアジュの手をとった。二人、手を握り合って周りを見渡した。

おそらくここは地下なのだろうが、不思議なのは真っ暗な中、たいまつが道標のように灯っている。

いったい誰が灯しているのか。さらに不思議なのは闇の中に灯があるのに、周りが闇であること。真っ黒い建物の中にでもいるかのようにだ。

リツカがピクリとする。頭の中に声が響いてきた。聞いたことのない、ひどく割れた声だ。性別も分からないような声だが、おそらくこれが魔神の声なのだろう。

リツカを呼んでいる。こちらへおいでと呼んでいる。

花嫁を求めている。

アジュを見る。彼にも聞こえているのか、頷いた。

それでももう充分だ。やるべきことは決まっているのだから。

二人は進む。迷いはない。恐れもない。つないだ手だけが、支える証。

ゆらりと何かが先のほうで揺らいだのが見えた。そこが目的地なのかもしれない。

魔神がいる場所。これから、今までの全てを打ち壊す場所。

アジュは足を止めた。恐れではない。リツカを振り返る。

「姉さん」

魔神と戦う前にひとつだけ、やっておきたいことがあるのだ。

「少しだけ、ぼくに血をくれる？」

あなたにあげた指輪あかしのように。

リツカはアジュの意図を察し、微笑んで頷いた。自分の左手薬指はめた指輪の少し上の部分に歯をたて、噛み切る。

ぷくりと浮かんだ紅い血を、アジュは指にすくいとった。

「血の婚姻を」

その言葉とともに、指の上の血は変化した。最高級のルビーのように輝くそれを、彼は自分の耳たぶに押し付ける。

すると、じう！ と音をたてて、リツカの血はアジュの耳でピアスと化した。もう一度同じことを繰り返して、両方の耳に血のピアスをしてから、アジュは姉の指を癒した。

その様子を見つめていたリツカは、自分を指して指輪を示す。

声のない言葉を理解して、アジュは先ほどリツカがやったように自分の左手の薬指を噛み破った。

浮かぶ血を、今度はリツカの指輪に移す。

おもちゃの赤い石は、深い深い真紅に変わる。

それは誓いだ。

……『永遠に、あなたとともに』。

戻れない道。戻らない意思。

魔神は、もう、すぐそこにいる。

\*\*\*

「早く！」

シェリが言う。

「早く！」

サリュが叫ぶ。二人は塔の中の気が変わったような娘七人を連れて、塔を逃げ出した。

送還の儀を終えた兵士たちが戻ってくる前に、門へ、外へ逃げなければならぬ。

見つければみな殺される。娘たちはもう用済みなのだ。花嫁にも

なれなかった娘に生き延びる術などない。

……リツカとアジユは逃げてとிட்டのだ。これ以上この国のために犠牲が出ることはない。あつてはいけない。

「だからお願い」

「逃げてくれ」

姉弟の頼み。最後の願い。シェリもサリユもなんとしてでもかなえたかった。

それがどれだけ無謀なことか分かっているにも。

たいまつが、円を描く。たどり着いた先は円形の部屋らしかった。たいまつが灯つてはいるものの明かりは部屋の隅のみで、中心までは届いていない、そんな部屋で。

「待つていた……姫君よ」

低い 女の声がアジュとリツカを迎えた。

黒の中、同色の何かに腰掛けている女。中心は暗いのに、何故かその女だけは姿が確認できる。顔の半分以上を隠す奇妙な仮面をつけていた。

目まで覆い隠されて、こちらを見ることなどできないはずなのに。……おや、二人か」

女は、アジュとリツカを認めて見せた。

「男と……女。何故？ 姫と王子か……？」

「お前が、魔神なのか？」

アジュの声に、女はゆっくりと笑った。

「ああ そうだ」

すう、と……立ち上がる。

「魔神を殺して、力を得た者だ」

くくくく。女は低く笑う。

「だから今は、私が魔神だ」

「魔神を……殺し……！？」

「昔話をしよう」

アジュとリツカの驚きをさらりと聞き流し、己を魔神という女は語り始めた。

罪と咎（つみととが）

「始まりはこの国ができる前。この砂漠の地に独り、魔神がいた。そこへ水を求めて移動する一族が現れ 内の娘が魔神に見初められたのだ。一族はこの地に永住を決める。水も緑も魔神の力で豊富

に与えられた……」

それがサンディーノの始まりか。この呪われた国の。

「だが、若い男が反抗した。もともと娘の夫となるべく決められた男だ。己の妻となるべき娘を魔神に奪われ逆上した。男は魔神の不意をつき、剣で斬りかかった。」

女は自分の仮面にそおつと手を添えた。

「魔神は男を難なく跳ね除けた。男は剣を己の腕ごとちぎり飛ばされ絶命した。」

そして、飛んだ剣は「

仮面が外される。」

「離れて見ていた幼子の顔を切り裂いた」

そこにあるのは両目を斜めに切り裂いた無残な傷跡。

「それから二十年ほどたった頃、魔神とその妻となった娘を疑いが襲う。互いに誰かほかの人物と通じているという噂が元となった。

醜い口論だった……人間を遥かに超えているはずの魔神が口汚く妻をののしる……妻も夫を疑い、泣き叫んでいた」

仮面を再び顔にまとい、女は笑った。過去に起きた出来事をあざ笑っている。

「……そこを、私が突いた。魔神の背をめぐけて剣を突き刺した。

何の力もなかった女の剣はあっさり魔神を貫いた。揉みあつていた妻をも同時に貫いて。あっけなかった……私が流した噂だどちらも最後まで気付かなかった。人を超えた力を持つ魔神ですら」

ふふふふ。笑う声がこだまする。

「魔神は死に、その力は殺した私に宿った。この面がその証……」

指先が仮面を撫でる。姉弟にはその仮面から、強い力が発せられているのが分かる。

女の言葉は本当だろう。なかば以上を狂気に浸っているが、その力だけは本物だ。

だが、腑に落ちないことがある。女の独白は止んだようなので、

アジュは問う。

「お前は何故、姫を望むんだ。女のお前が」

そうという性癖の持ち主かとも思ったが……何か違う気がする。ならば、何故王家の姫君を望むのだろう。

「生き返るだろう」

女はこともなげにそう言った。

「何……？」

「高貴な血を注げば、いつか魔神は蘇る！」

高ぶる女の声に応じるかのようにあたり一面を光が照らした。そうして初めて姉弟は室内の様子を見た。

山と積まれた少女の死体と、先ほど女が座っていた場所に干からびたミイラ。

その腹にはさびて原型のないものが刺さっている。

「これが魔神」

うつとりと……女はミイラを撫でる。愛しくて仕方がないというように。

「私が愛した魔神……私だけの」

独占したかった。そのために殺したと。

「魔神のために血を注ぐ。そうすれば、いつか目覚めたときに私だけのものになる」

そこには厳然たる狂気があった。もはや常識は通用しない。自分だけの、独自の世界しかない。

「ほんとうなら、一人でなく皆殺して血を注ぎたいが、血が絶えても困る。だからいつも一代人の姫としていたのだが……」

そこでようやく、嬉しそうに女は姉弟を『見』た。

「今回は二人か……嬉しいぞ……くくくつ。多ければ多いほど魔神は早く蘇る……」

女は魔神の腹から突き出ているさびたものを手に取った。それは見る間に生き返る　銀の輝きを宿す刃へと。

「さあ……おいで。王家の高貴な血を注がねばならない」

蘇るわけがない。思いながらアジユは金属で強化してある棍を構えた。

高貴な血を注いで命が蘇るなんて聞いたことがない。禁呪にすら存在していない。

女が勝手にそう考えて実行しているだけだ。狂気にさらされた頭で考えることなど常人に理解できる代物ではない。

それに、今まで注がれた血は王家のものではないのだ。

いつからか、全てが歪んだ。

いや、最初から　この女がやったことから歪んでいるのだ。

歪みはねじれ、もはや修復できないほどだろう。

「無駄だよ……全部」

リツカにしか聞こえない小声でアジユは呟いた。

「ぼくがお前を殺すから」

地下にいる歪んだ女。ねじれを正すつもりもない地上の人々。

ならばいつそ、壊してしまえ。

ガキィ！！　金属が打ち合う音が室内に響く。

\*\*\*

「待てえッ！！」

追う声が夜を切り裂いた。

わけも分からず、ただサリュとシエリについてゆく娘たち。七人も連れて逃げ切れるはずがなかった。中には気がふれているような娘もいるのだから。

それでもシエリは必死に叫ぶ。

背後に迫る追っ手の灯が絶望的なまでに近付いて来ても。

「走って！　走るのよ！」

生きるために。

「早く！」

少しでも長く生きるために。

「シエリ、先に行け」

サリユが言う。老年の彼はもう息が切れてきている。

「えっ……サリユ？」

「わしがくいとめる」

慣れぬ剣を手に、老人は身構える。

「死ぬのは……オイボレからでいい」

「サリユ……！！」

「行け。リツカさまの願いをかなえてやってくれい」

シエリは何も言い返さなかった。頷いて娘たちを率いて走った。

サリユの思いを理解していたから、振り返らなかつた。

追いついてくる民の灯に、怯えることなく臆することなく、

サリユは静かに思う。

お仕えできたことを後悔していない。ただ思うのは、もっと長く、できれば永遠に姉弟に仕えたかった。かなわぬ夢であるうが、それでも……。

「……先にゆくことになりそうです、リツカさま、アジュさま」  
願わくば永遠に、あなた達をお守りしたかった。

……鋭い刃が次々と老いた体を貫いた。枯れた体にもこれほどの血が流れていたのかと、ぼんやりと思うサリユの視界は、真紅の渦に包まれ……。

\*\*\*

「知らないでしょう」

彼女の目の前では、女とアジュが戦っている。武術、魔術ではアジュが勝っているが、女には妙な力がある。手も触れず、呪文も唱えずにアジュを吹き飛ばす。

おそらくこれが魔神の力だ。自身の身に防御結界を張り巡らせているため、アジュは傷一つ負っていないが、女の妙な力のせいで彼のほうも効果的な一撃を当てられない。

年齢の割に達人といってもいいアジユですら、苦戦していた。

ひとりでは無理。どうしようもないくらい的事实だ。そしてその  
事实は、姉弟のどちらとも予想していたことであった。

「知らないでしよう、わたしを」

リツカはそつと、指輪に触れる。最愛の弟の血を宿した、約束の  
指輪。

アジユがいればいい。永遠を彼と誓った。アジユだけが、全て。

「わたしの強さを」

ためらわない。迷わない。細い指はゆっくりと複雑な印を結んで  
いく。ひとつひとつ、確実に。

「二人で生きてゆくために」

真昼の空色の瞳は、強く女を射抜いていた。女は気付かず、アジユ  
だけを見て戦っている。喋れもしないリツカなど最初から眼中にな  
いようだった。

「あなたは邪魔なの」

それが、命取りだった。アジユが飛びのく。彼はしっかりとタイ  
ミングを計っていた。

その瞬間によやく女は気付いた。

物言わぬ花嫁が己を指したことに。

「！？」

気付いたときにはもはや遅い。禁呪が発動する。

女が感じたのはドンッ！という重さだけ。

「ば……かな……ど、うやって……呪文をつ！」

魔力が球を形作り、炸裂する。音はない。絞り込まれた衝撃は、  
わずかな範囲をズタズタにしてのけた。中心に、手足を失った女が  
倒れる。

少し離れたただけのアジユにはかすり傷一つない。驚異的なまでの  
制御力である。

「呪文は印で代用できる……それを知っているのはぼくたちだけだ  
けれどね」

手足の再生を始めた女に、アジユは近付く。あれだけのダメージで死なないのはさすがだが、再生に手一杯で女にはもう反撃の術はない。

「お前は邪魔なんだ」

女の顔面に渾身の力で棍を撃ちつける。

「アアアッ！ やめろおっ！！」

「いやだ」

五度目で仮面にひびが入った。

「いやっ、いやあッ！！」

女が叫ぶ。仮面にひびが深まるほどに、再生のスピードが落ちてゆく。

アジユはかまわない。

リツカも冷たく女を見下ろしている。

七度目でひびはさらに大きくなり、九度目で仮面は二つに割れた。そこに宿る力が室内にあふれ出してくる。

目には見えない力が、アジユとリツカの周りに集い始めている。

「うあああああッ！！！！」

悲痛な叫び。力が失われていくことが嫌でも女に理解を強いる。もはや魔神の力は女のものではない。

徐々に、女を打ち倒した姉弟へと移ってゆく。

女が魔神を殺したときのように。

「いやだっいやだっ！ 私は魔神を蘇らせて……！！」

「そんなこと、ぼくは知らない。関係ない」

「私がこんな顔だからかっ！？ だから皆邪魔するのかッ！！ 私

は、私はアアアッ！！」

「お前なんか知らない」

揺らがないアジユの声。無慈悲な一撃が、女の額を撃った。後を追うようにリツカの魔法が女を穿ち 全てが終わる。

## 終わりに…… CONCLUSION

サリュは見た。自分の人生が終わるその瞬間に。

「サリュ」

何よりも大切なその姿を。

「……わしは……永遠にあなたたちに……」

枯れはてた老人の、唯一の泉。

「お仕え……したいのです……」

その願いと同時に、サリュの命は尽きた。

『彼女』は倒れ伏している老人にそつと触れる。細く白い手が優しく触れる。その両手の中指には、今まではなかった複雑な紋様の入った指輪が光っていた。とてつもない力を宿したものだど、その場に居た者が気付いたかどうか。

「サリュ、ありがとう」

封じられたはずの声で、『彼女』は言う。

わがままを聞いてくれて。今まで護ってくれて、仕えてくれて。

そして今、その命かけた願いを聞いた。それがあなたの最後の願いなら。

そつあなたが願うならば、わたしは応えよう。

『彼女』はゆっくりと立ち上がる。サリュを手にかけた追っ手たちが我に返って武器を構えた。

『彼女』の大切な人を手にかけた人間たち。

腐った国の上で、まだのうのうと暮らそうとしている人間たち。

「あなたが殺してきた命は……あなたたちよりもずっと価値ある命だわ」

それを知らずに消してきた。知らないフリで消してきた。

今こそ、その命を持って償え。

『彼女』の後ろで、今さつき事切れた老人は目を開ける。尽きたはずの命があることが自分にも理解できた。『彼女』がもう一度その

機会をくれた。

ああ、と老人は歡喜する。もう一度、この方にお仕えできる。それも、永遠に　！

老人は吼えた。その身はもう人ではないけれど、何よりも力ない老人の体ではないことが嬉しい。これで護れる　誰よりも大切な方を　！

ゆっくりと身を起こす。先ほど自分を突き刺した刃がぼろぼろと落ちてゆく。ひどく小さく細く頼りなく見えた。

刃が自分を傷つけることはもはやない。

自分を刺した人間たちが恐れおののき退くのが見える。

自分より弱いものには強く出るくせに、強いものには怯えて命乞いするのか。

助けてくれと祈るものがいた。魔神に助けを請うものもいる。

サリュは『彼女』に視線を向けた。この体では人の言葉はもう使えないだろう。喋ろうとしても出るのは唸り声だけだった。それでも『彼女』には通じている。

主たる『彼女』には充分に老人の声が聞こえている。サリュがなにを望んでいるのかも。

「サリュ、構わないわ。あなたがしたいようにすればいい。ここはもう滅びるだけなの。こんな歪んだところは、もう終わり」

『彼女』はそう言ってくれた。そうか、と老人は理解する。魔神はもうどこにもいないのだ。いるのは、老人が何よりも大切にしていた二人。

あきらめなかった二人が、奇跡のような現実を手にしたのだと理解した。

サリュは咆哮する。それは喜びの声だった。開放を告げる声だった。

サンディーノの終わりを告げる声　。

シエリは見た。門で追っ手に斬られようとするその瞬間に。  
「シエリ」

シエリは聞く。もう二度と聞けないであろうと覚悟していた声を。追っ手はひるんだ。追っ手にとって『彼』は姫君の婚約者だ。うかつに剣を向けていい相手ではない。そのわずかな瞬間で、今の『彼』には充分だった。

手にしていた棍を軽く振るう。金属で補強していたはずのそれは『彼』が魔神に挑む前とは様変わりしていた。今は銀色の竜が巻きついている。

『彼』の髪の色と同じその竜が、とんでもない力を持っているものだ。と、シエリは気がついた。そして理解した。

『彼』らが奇跡を手にしたのだと。追っ手たちが砂の塊に変化した。『彼』が棍を軽く振っただけで、だ。

ああ、間違いない。シエリは確信した。今自分の目の前にいる方は、ご自身の力で未来を切り開いた。きつと『彼女』も無事だ。良かった。

恐ろしい力を目にしておきながら、シエリが思うことはそれだった。

良かった。たとえこの場で『彼』にこの身を砂と変えられようとも構わない。

良かった。この方たちが無事で良かった……！

ただ一心にそれだけを思う。この後サンディーノには滅びがあるだろう。自分もその中に含まれても構わない。ただ、この方が幸せであればいい。

『彼』は笑った。少年らしい微笑だった。シエリの考えていることが伝わっている。

くすくす綺麗に笑いながらこう言った。

「シエリ。君をこの街と一緒に沈ませるつもりはないよ」

ふわりと、自分の身が浮くのをシエリは感じる。足先が地面から離れている。

「生きてほしい。君がぼくたちにそう望んでくれたように」  
竜巻が起こった。シエリは娘たちとその中にいるというのに恐れはない。恐れるわけがない。

「そして、ね？ もう一つわがママを聞いてほしい。これは塔の中にいた君たちにしかできないことだから」

サンディーノが遠くなる。『彼』も遠くなる。それでもその声ははっきりと聞こえた。

『彼』の願い。わがママなどではない。そうするべきだとシエリも思う。

もう二度と、サンディーノのような場所は作らせない。こんな歪んだ場所があつてはならない。そのためには、ほかの人々に伝え続ける必要がある。

こんな愚かな真似はしてはいけないよと、言い続けなければ。

人は愚かだから、醜いから、せめて同じ過ちを繰り返さぬように

「はい……はい！ お守りいたします、その役目を……この命ある限り！」

塔の中にいた娘たちと、シエリにしかできないことを、託された。腐りきったサンディーノの実情を後世に伝える語り部として。

ああ、とシエリは思う。なんて幸せなのだろう。

大切な方に望まれた。生きてほしいと望まれた。何より大切な役割を託された。

これ以上の幸せがあるだろうか。

竜巻が娘たちをそつと優しく町や村に下ろしてゆく。サンディーノが滅ぶことをこれから彼女たちは伝えてゆくのだ。

最後にシエリが残された。天高く竜巻は上り、サンディーノの最後をシエリに見せた。

咆哮が聞こえる。シエリにはそれがサリュだと理解できた。サリュはあそこへ残るのだ。サリュ自身がそれを選んだのだろう。少し

うらやましかった。『彼』らにお仕えしたい気持ちはシエリも同じだ。

でも、自分には役目がある。優しい竜巻が町に近付いてゆく。あそこで、自分にできることをしよう。シエリは胸に手を当て、『彼』に向けてそう誓う。

託されたこと、この命の限りお伝えいたします。

ですから……お待ちしてもよろしいでしょうか。

いつかもう一度、あなた様方にお仕えできることを。

サリュのように、永遠に。

竜巻が消え、シエリはふわりと地面に降ろされた。それから一輪の花が彼女の手には舞い落ちる。

砂漠にありえない、鮮やかな白い花。

それが約束だと、シエリは理解した。

\*\*\*

「何が起きておる!？」

騒ぎの中、姫君はそう叫ぶ。

贅沢ぜいたくで華やかな宴は一瞬にして終わりを告げた。

水が枯れ、緑が失せてゆく。なにが起きているのか誰も理解できていない。

竜巻が起こり、何も知らない子供の姿だけが消えた。残っているのは腐敗を知っているながら、その上で安穩と暮らしていた者ばかり。

「一体なんじゃ! どうしたというのじゃ!」

王が叫ぶ。娘の命惜しさにほかの娘を犠牲にしていた王。

「なにが起こっているのか、わからない?」

鈴のような美しい声でした。誰もがその声に動きを止めた。聞いたことがないような美しい声。目をやると、月を背に、妖精シンかと思うような美しい娘が立っている。

姫と同じ年頃のようなだが、姫よりも遥かに美しい娘だ。

「……そ、そなたは？」

王はうろたえた。その娘をほしいと思った。今あるハレムの中の女のどれも目の前の娘にはかなうまい。この期に及んでも、王は己の権力を疑っていなかった。己が望むものは何でも手に入ると思っている。魔神の力がかなえてくれると信じていた。

「あなたが知る必要はない」

その傍らに、少年が立っている。銀髪の　愛娘の婚約者に選んだ少年だ。

二人とも、美しかった。まるで人ではないかのように、幻想的でただ美しい。

「あ、アジュ？」

姫が呼びかける。少年は応えない。必要がないからだ。

王も、姫も、この国も。

「さよなら、汚い大人たち」

風が吹いた。少年と少女の姿は消え失せる。

王は最後まで何も分からなかった。自分と姫の体が砂の塊になっても。

豪華な建物だけが残り、人の姿はサンディーノから消え失せた。

その夜、サンディーノは砂に沈む。遙か昔に絶滅したはずの砂竜が上空を飛び、その背には二つの人影があった。

以来、夢の都は竜巻に閉ざされる。

嘘と欺瞞と欲望が渦巻いていた腐敗の都は一夜で消滅し、入ることを許されぬ、幻の都と化した。

それが、百年前の話。

遠い遠い過去のお話。

ほんとうにあった、これが真実。

罪と咎（つみととが）

終わりに…… CONCLUSION（後書き）

子供だからできる選択と、大人がした選択。その末路は終焉でした。

## エピソード

彼女が深々と息をつき、話は終わった。半日ほどを費やした、長い話だった。

それでもまだ、訊きたいことはたくさんあった。

『それからの姉弟』の話を知りたかった。

どうしたのだろうか、それから。

今でも生きているのか？

竜巻に閉ざされた都の中で？

魔神の力をその身に宿して……ずっと？

私の疑問に、彼女はとても嬉しそうに笑った。

「それからお二人はどうなったかって？ ……ふふ」

幸せそうだった。

「もう少ししたら、あたしを迎えに来てくださるんだよ。サリュに乗ってね」

ほんとうに……至福だというように、笑っていた。

「あたしは天に召されるのではなく、永遠にお二人にお仕えするのさ」

そういう彼女の手には、鮮やかな白い花がある。話の間もずっと、彼女はその花を片時も離さなかった。

長くいるんなところを旅した私にも見たこともない品種だ。これがさつき話に出てきた『約束の証』の花なのだろうか。百年以上も枯れない花など存在するのか。確かめる術などないのだが、何故だろう？

私はその時、うらやましいと思ったのだ。ほんとうかどうかも分からない、彼女の幸せそうな言葉を。

彼女は私を見て、今度は楽しそうに笑って言った。

「サンディーノの腐った過去を伝え続ける役目はあんに譲るよ、学者さん。あんななら、ごまかさずに必ずやりとげてくれるだろう」

から」

そうしたら、逢えますか。私は真剣に尋ねた。

あなたの後を継いだら、その姉弟にあえますか、と。

「……さあね。あたしにやなんとも言えないよ。けれどあんたが  
伝え続けてくれたなら……」

いつかお会いしてくれるかもしれない。

彼女はそう言ってから、疲れたよ、と呟いた。

私は丁寧に礼を述べて、その日は退出した。

\*\*\*

数日が過ぎて、私は手記を書いている。

伝え続けるために。今や私が最後の語り部なのだから。

……老女シエリは、私が話を聞いた翌日の夜、息を引き取った。

死因は老衰。当然だ、彼女は百歳を越えていた。

いや、気にするべきことはそこではない。

彼女が亡くなった夜、砂竜が町の上を飛んでいたという。

絶滅したはずの砂竜……もしかしたらその上には人影がふたつあ  
ったのではないだろうか？

もしかしたら、それは。

い。……いや、きっと思い過ぎだろう。確かめる術すべなどどこにもな  
い。

だが いつか。

私は思う。

いつか行ってみたいものだ、と。

失われた都、サンディーノへ。

魔神の力を得た、美しい姉弟に逢えるのならば。

## エピソード（後書き）

これにて「罪と咎」は終了です。砂の都の彼女と彼は、永遠にそこにあり続けます。それを望んだ二人ですから。

罪と咎（つみととが）

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9066c/>

---

罪と咎（つみととが）

2009年3月24日12時03分発行